

「花と蛇3」 ★★★

2010（平成22）年7月28日録

頁<東映試写室>

監督：成田裕介

原作：団鬼六『花と蛇』（幻冬舎アウトロー文庫刊）

静子（新進チェリスト）／小向美奈子

伊沢（執事）／火野正平

遠山隆義（東山グループ総裁）／本宮泰風

折原（教育係）／水谷ケイ

美沙江（メイド）／琴乃

2010年・日本映画・106分

配給／東映ビデオ株式会社

<杉本彩から小向美奈子へのチェンジは？>

『ハナヘビ』の劇場映画化は、1974年の谷ナオミ主演の『花と蛇』が最初で、本作は8作目とのこと。私が実際に観て評論を書いたのは、杉本彩主演の『花と蛇』（04年）（『シネマルーム4』156頁）と『花と蛇2 パリ／静子』（05年）（『シネマルーム7』324頁）の2本。この2作ともにオークションのシーンがハイライトだったが、いずれもかつての「学園祭の女王」から「アルゼンチンタンゴの女王」へと華麗に変身した杉本の艶技が見モノだった。

それに対して『花と蛇3』で主演を演じるのは、私も名前だけは知っている、かわいい顔に似合わない大きなおっぱいが売り物の小向美奈子。彼女はグラビアクイーンだったが、2009年にはアイドルからストリッパーへと変身し、同年6月に東京浅草のストリップ劇場、浅草ロック座にゲスト出演したというから恐れ入ったもの。前2作は杉本の円熟した女の魔性が売り物だったが、今回は1985年生まれという小向の若さとおっぱいの大きさが勝負。さあ、杉本彩から小向美奈子へのチェンジはいかに？

<冒頭は波乱含みだが、調教色だけでは・・・>

劇場版『花と蛇』がアダルトビデオと異なるのは、ストーリーの軸と展開がしっかりしていること。本作もそれは同様で、映画冒頭は関西財閥の会長・海東義一郎と幸せな結婚生活を送っている静子（小向美奈子）の姿が映し出される。そんな静子に好色そうな目を向け、老齢の海東からこれを奪おうと画策したのが、遠山グループの総裁遠山隆義（本宮泰風）だ。そして、海東は破産に追い込まれた挙句あつけなく死亡。その結果、海東の葬儀直後にふんどし一丁で全身入れ墨の男たちを含む怪しげな一向に屋敷から拉致された静子に待ち受けていたSMの儀式とは？

そんな冒頭の展開は波乱含みで大いに期待を持たせたが、遠山が静子を誰にも知られていない別荘に連れて行ってからはスクリーン上は調教色一色に。静子の調教をするのは、執事の伊沢（火野正平）、教育係の折原（水谷ケイ）、そしてメイドの美沙江（琴乃）たちだ。本作は新たな緊縛のテクニックがいっぱいあるらしいが、そんなことにチンプンカンプンの私には、後半の調教色一色だけでは少し不満・・・。

<こんな終わり方も、ちょっと・・・>

遠山はよほど静子に惚れ込んでいたらしく、静子を正式な妻にしたが、そりゃストーリーの組み方としてはちょっと不自然では？菅直人総理の奥さんである伸子夫人がつい先日出版した『あなたが総理になって、いったい日本の何が変わるの』（幻冬舎）が、現在大きな話題を呼んでいる。そこまで目立たなくとも、遠山グループの総裁の妻ともなればオフィシャルな活動がいろいろあるはず。したがってSMの調教を受けている静子が正妻では、遠山の行動はカッコがつかないのでは？

映画は中盤から後半にかけて調教色一色になるが、伊沢たちの調教よろしきを得て、静子は本来もっていたM志向に目覚めたらしく、今や自分から積極的にそれを求めていくまでに。遠山はそんな静子にいたくご満悦。したがって、今や遠山はお仕事もプライベートも絶好調のはずだが、そんな中映画はある意外な結末を迎えることに。しかし『ハナヘビ』に劇場映画的なスリリングな展開を期待している私としては、こんな終わり方はちょっと・・・。

2010（平